

# ナボコフとハーン

## トランス・アトランティックな想像力がトランス・パシフィックな想像力と出会うところ——あるいは文学的バタフライエフェクト<sup>1</sup>

秋草 俊一郎

### 1、蝶の句の謎

一九二〇年代、当時まだ「V・シーリン」と名のっていた若きウラジーミル・ナボコフは、詩を書きためるとノートブックに書きうつす習慣があった。その中には、いまだに公刊されていないものも少なくない。作家の初期の創作を知るうえで貴重な資料群は、現在、ニューヨーク公共図書館のバーク・コレクションに厳重に保管されている<sup>2</sup>。そのうちの一冊、一九二三年にまとめられたノートのタイトルページには、鉛筆書きの蝶のイラストが描かれている。まるで標本箱のなかに展翅されているかのように翅を広げたリアルな蝶の絵の下には、ご丁寧にラベルを示す長方形の枠線がひかれ、その中には、採集者の名前と種名が、“*VI. Sirin, Cmuxu, 1923.*” 「ウラジーミル・シーリン、詩集、一九二三年」と書きこまれている。このタイトルページが示すのは、青年ナボコフにとって、詩想を書きとめることは、ナボコフのもうひとつの情熱の対象だった蝶の採集にも似ていたという事実である。

しかし、それだけではない。蝶の絵の下にはさらに、一種のエピグラフだろうか、三行の詩が書きうつされ、括弧内にロシア語で「(日本の発句)」と説明が書き添えられている。原文のまま引用してみる。

Chō wo ōi

Kokoro-mochitashi

Itsumademo!

「蝶を追う／心もちたし／いつまでも」——この句は、<sup>エターナル・バタフライハンター</sup>永遠の蝶追い人——非常勤とはいえハーヴァード大学比較動物学博物館でキュレーターを務め、シジミチョウの専門家として論文も発表していた——ナボコフにいかにもふさわしいものに映る。晩年のナボコフが補虫網を手にした姿は、写真家ホルスト・タッペが撮影した一連の写真によってよく知られ<sup>3</sup>、ナボコヴィアンのアイコン／アイコンになっている。実際、W・G・ゼーバルトの小説『移民たち』にも、補虫網を持ったナボコフの写真が使われている。

他方で、この俳句の引用が謎めいていることもたしかだ。幼いころから露英両言語に通じたバイリンガル作家（フランス語もいれればトリリンガルになる）とはいえ、ナボコフが日本語

を読んだという話は伝わっていない。そもそも、この「発句」には出典どころか、ロシア語訳も英訳も添えられてはいない。では、いったいどこで作家はこの印象的な三行詩を発見したのだろうか？ そして、その作者はだれなのだろうか？

## 2、フィールドの仮説

この「謎」は、ナボコフ研究者には既知のものだった。さかのぼること半世紀前、当時ナボコフ研究の世界的権威だったアンドルー・フィールドはこの文学的ゴルディアスの結び目を解こうと試みた。ナボコフの死後刊行した大部のモノグラフ『ウラジーミル・ナボコフの生涯と芸術』のなかで、フィールドはひとつのある仮説にたどりつく。

もうひとつのエピグラフは日本語の俳句だ。ナボコフはケンブリッジに日本の友人はいなかったが、皇太子裕仁の専門は、ナボコフも学んでいた魚類学だったことを考えると、裕仁がナボコフのためにこの句を詠んだというのはじつにありそうな話だ。というのも当時トリニティ・カレッジには日本人はいず、魚類学を学んでいる日本人もいなかったからだ。母への手紙でナボコフは裕仁に会ったことを報告しているが、まるでサルみたいだったという。この俳句はエレガントとは言いがたい。<sup>4</sup>

フィールドのアクロバティックな推理によれば、日出ずる国の皇子が、この「エレガントとは言いがたい」ハイクを詠み、日没する国の貴族の子弟に友好のしるしとして贈ったのだという。

ナボコフがケンブリッジのトリニティ・カレッジで学寮生活を送っていた一九二一年（大正一〇年）、わずか五年後に即位することになる弱冠二〇歳の裕仁は、皇太子としては初めての欧州外遊にのりだし、その一環として英国にたちよった。記録によれば一九二一年五月一九日、皇太子はケンブリッジ大学でF・R・タネル教授の講義「皇室と臣民の関係」を受けたあと、トリニティ・カレッジでおこなわれた晩餐会に出席している。

ナボコフがヒロヒトと蝶をつうじて心を通いあわせていたというのは、日本人にとってはなかなか愉快で心温まるヴィジョンだ。実際、たしかに裕仁もナボコフが言う「詩の精密さと純粋科学の興奮」を解する人物だった<sup>5</sup>。昭和天皇が海洋生物学の研究に打ちこむ一方で、一万首にもおよぶ短歌を残したことはよく知られている。しかし、残念なことに、この国際交流を証明する手がかりはなにも残されていない。一九二一年に贈られた句を、一九二三年になってノートブックに書いた経緯も謎である。また、母への手紙に「サルみたいだ」と書いたことからうかがえるように（この引用には、ナボコフの伝記執筆中に事実とは異なる、作家の意に沿わない記述を繰り返し、決裂したフィールドの悪意が見え隠れするが）、日露戦争の敗北の苦い記憶がまだ新しいなか、ナボコフがこの急速に拡張しようとしていた極東の帝国の王子をあまりよく思っていなかったとしても不思議はない。ポリシェビキ革命のひとつの遠因になったこの敗戦については、自伝のなかでも繰り返し言及されている<sup>6</sup>。こうしたことを考えると、ナボコフとヒロヒトが一時的とはいえ親しく接したというのは、じつにありそうもない推理なのだ。

### 3、もうひとりの<sup>コスモポリタン</sup>越境者

ここで、この「文学パズル」を解くために、もうひとりのコスモポリタンを召喚しよう。パトリック・ラフカディオ・ハーン——それがパズルのピースの名前だ。多言語や多文化を生きたという意味では、ハーンはナボコフの先輩にあたるような経歴の持ち主だ。一八五〇年、ギリシアのレフカダ島で、アイルランド人の父親と、ギリシア人の母親を両親に生まれたハーンは、イギリスとフランスで教育を受けたあと、アメリカに渡り、文筆で口を糊するようになる。しかし同じく旧世界から新世界への移民ながら、ナボコフが最終的にヨーロッパにもどり、スイスで没したのに対し、ハーンはさらに西進し、東の果ての国までたどり着くと、そこで「小泉八雲」としてところをえた。

ハーンの業績として、日本の民話や伝承の再話を欧米に紹介したことは有名だが、他方で昆虫や小生物の類にも関心をもち、エピソードを収集していたことはあまり知られていない。ハーンの没年に刊行され、そのもっとも有名な著作となった『怪談』（一九〇四年）は、そのタイトルと、「耳なし芳一」やのっぺらぼうの「むじな」の印象が強く、一般にはもっぱら妖怪話や怪異譚の類だと思われる。実際、国内のこどもむけのエディションではその部分だけを抜きだして編集されていることも多いのだが、もともとの原本には、怪談話のあとに「虫の研究」というセクションが設けられていた。これは、ハーンが日本や東洋の虫をテーマにつづった随筆を集めたものである。そのうち「蝶」と題された章では、古今の東アジアの蝶にまつわる伝承とともに、蝶を扱った俳句が、日本語をアルファベットで翻字したものと、その英訳で紹介されている。そこに、ナボコフが引用した件の俳句も、ノートブックに書きぬかれたそのままの形で、“Would that I might always have the heart (desire) of chasing butterflies!” という英訳とともに掲載されている<sup>7</sup>。

ハーンは出典を詳らかにしてはいないが、この句は江戸時代の俳人・医師、井上杉長（いのうえさんちょう、一七七〇—一八二八年）によるものようだ。安房の国に住んでいた杉長は小林一茶とも親交があり、医者としては松平定信を診たこともあった。この「蝶を追う／心もちたし／いつまでも」の句は、杉長の辞世の句だされている。

話をハーンに戻す。ハーンの死後も、その作品は——<sup>ルポルタージュ</sup>文学<sup>作品</sup>というよりは東洋の神秘的な国の見聞録として——何度か再版され、西洋で広く読まれた。ボストンのホートン・ミフリン社は、ハーンの十六巻におよぶ大部の著作集を出版した。その十一巻の、『骨董、怪談』が出版されたのが、まさに一九二三年のことだった<sup>8</sup>。ナボコフはおそらくこのリプリント版をなんらかのかたちで入手し、見慣れない三行詩を自作の詩集のエピグラフに使ったのだろう。

### 4、ナボコフとハーン

ナボコフとハーン——この二人の脱領域作家の関係については先行研究がないが、両者のあいだにはごく表層的なレベルでさえ、多くの共通点があげられる。ハーンは経済的困窮、ナボコフは政治的亡命という違いはあるが、二人ともヨーロッパからの<sup>エミグレ</sup>移民であること。ハーンもナボコフも母語のほかに外国語を能くし、翻訳の仕事も多いこと。根なし草として世界中

を遍歴し、二つ以上の文化に大きな文学的足跡を残したこと。そして最後に、ともに虫を愛したこと。

ハーンは科学者ではなかったが、生涯を通じて虫についての随筆を多く残した。ハーンの視線は、自分が終の棲家とした極東の島国——そこで人々は鈴虫の声に耳を傾け、蛍の光を愛でる——で、虫がいかにか重要な文化的モチーフとなっているかに注がれている。記述には生物学的な間違いも散見されるが、ハーンの虫についての散文を編集した昆虫学者の長澤純夫によれば、ハーンの興味は一貫して昆虫学的なものではなく、民俗学的なものだという<sup>9</sup>。実際、ハーンの視線は現物の虫がどのようなものかというよりは、口承や説話に注がれている。

その一方で、ハーンの胸に東洋の蝶のモチーフが飛来したのは、現実には日本の地を踏む前のことだった。渡日する以前の一八七六年、アメリカ時代に書かれたエッセイ「蝶の幻想」で、ハーンは蝶の華麗さと東洋の美を同一視していた。

民族性というものがその土地の風土によって形作られるという事実は、もはや疑うべからざることに思われた。芸術も風習もこの風土の諸条件の影響を免れない。民族の好尚というのもまた、その自然環境の特性に合致した展開を遂げるのだ。とすれば、支那人に聖獣の龍を黄色に塗らせ、日本の扇子職人に見事な空を描かせ、インド人に古都のサラセン風アーチの完全美を教えたその同じ力が、支那の蝶の羽を黄色に彩り、日本の蝶の羽の上に夢のような空を描き、インド人の蛾の羽を優美なアラベスクの形に仕立てたのではなかろうか。<sup>10</sup>

ハーンの記事は、どこことなくナボコフの初期の英語散文「塗られた木」を思い出させる。これは、一九二三年（ナボコフが詩集に蝶の句を引用したのと同様）、ベルリンで当時流行していたロシア・キャバレー「カルーセル」が発行していた同名の小冊子に、ナボコフが書きおろした文章で、「V・カンタボフ」V. Cantaboff（もちろん、ナボコフ Nabokoff の一種のアナグラム）著とされていた。これは、ナボコフによる最初期の英語散文の試みながら、ブライアン・ボイドは伝記のなかでその文体を「巧み」と評している<sup>11</sup>。ナボコフはロシアの工芸品がロシア人の精神性を具現化したものだというクリーシェを説明するために、以下のような文からこの宣伝文を書きおこしている。

日本の蝶——その見事な尾翼をそなえた生き物は、繊細な翅脈がはりめぐらされた翅に鮮やかな色の飛沫と波紋をにじませている——は、いつも日本の扇や屏風から舞いだしてきたように思えるが、それはかの国の鳩色の火山が、鉛筆書きされることを大いに意識していたように見えるのとまったく同じである。<sup>12</sup>

自然と芸術の一致——この時点で、ナボコフの日本の蝶への関心の持ち方はハーンと似通っている。目をひくのは、二人とも「芸術が自然を模倣する」という通常のミメーシスの概念を

裏返してしまっていることだ。自然による芸術の模倣——これはナボコフの後年の擬態にたいする考え方に通じるものがある。ナボコフは蝶の擬態を、単純に天敵の目を欺くためのものとして説明するにはあまりに精緻すぎるとして、一種の芸術に似たものと考えようになった。

キャバレーの広告ということもあってか、この「塗られた木」の文章では、ナボコフにはめずらしく、扇や屏風に近い日本の蝶がなんなのか、くわしく書いてはいない。他方で、同年ノートに描かれたナボコフによる蝶のスケッチは極めて稠密で、素人にさえたやすく生物学的な同定をゆるすものだ<sup>13</sup>。学名は *Nymphalis antiopa* というこの蝶は、北半球に広く分布し、英語では「モーニング・クローク 喪服用の外套」の名で、日本ではキベリタテハの名でそれぞれ親しまれている。

## 5、胡蝶の夢

一九二三年、ナボコフはハーンの手によるアジアの蝶の記述を——詩人として科学者として——興味深く読んだにちがいない。しかし、ナボコフの目にとまったのは、蝶の俳句だけではなかったはずだ。ハーンは蝶をあつかった日本の俳句を採集しただけでなく、東アジアの蝶にまつわる伝承も集めて「虫の研究」で披露している。たとえば、ハーンは蝶をめぐる中国の有名な故事を西洋の読者に紹介している。

私は日本では莊周の名で敬われている中国の思想家についてもっと知りたいと思う。莊周は自分が蝶であるという夢をみて、その夢の中では蝶になりかわったようにありありとした感覚を持ったという。莊周の魂は蝶のかたちをとってさまよい歩いた。そして目覚めたとき、蝶の記憶と感覚は強く心に刻まれたので、人間のようにふるまうことができなくなったという……。<sup>14</sup>

これはもちろん、日本でも「胡蝶の夢」として知られる有名なエピソードだ。ハーンはここでははっきりとは書いていないが、この話の肝はもちろん、莊子にわきおこった存在論的な疑問にある。つまり、自分が蝶を夢みたのか、それとも自分は蝶に夢みられているにすぎないのか、いまこの私には決定することができない、ということだ。実際、ハーンはこのエピソードに想をえたとおぼしき「芸安之助の夢」という物語を『怪談』におさめている。そこで侍安芸之助の魂は蝶となって肉体を離脱し、もうひとつの人生を生き、ふたたび元の肉体に還ってくる。

この莊子の故事は、ナボコフにも強い印象を残したようだ。三〇年近くあとの一九五一年、コーネル大学でおこなった講義のさい、文学教授ナボコフはこのエピソードを「かつて、ある中国の哲学者は、自分は蝶だという夢をみている中国の哲学者なのか、自分は哲学者だという夢をみている蝶なのか考えつづけた」とアメリカの学生に披露している<sup>15</sup>。研究者ブライアン・ボイドによれば、ナボコフ最大の英語作品『アーダ』（一九六九年）にさえ、この寓話が用いられているという<sup>16</sup>。

こうした、自分が夢をみているのか、あるいは夢をみられているのか決定できないという構造は、ナボコフのほかの創作にも見つけることができる。たとえば、一九三一年にロシア語

で発表された短編「未踏の地」は、その最たるものだろう。この短編で、動植物の標本採集のため、主人公ヴァリエールは、グレグソンとクックをともない、熱帯雨林<sup>ジャングル</sup>をさまようはめになる。しかしヴァリエールは探検の道半ばで熱病に倒れ、グレグソンとクックは殺し合いをはじめめる。熱病にうかされ、ヴァリエールは「別世界」をかいま見る——安楽椅子、見知らぬ天井、毛布に新聞。これらは語りの裏側に仕組まれたもうひとつの現実だが、ここで示唆されているのは、ヴァリエールの悪夢じみた冒険が、臨終の床にある別の人物を襲った走馬灯なのではないかということだ。私たち読者は、どちらの世界が「現実」か、決定することはできない。

もちろん、このような夢のなかの夢、夢のなかの現実といったテーマは、胡蝶の夢だけでなく、ナボコフがより慣れ親しんできたロシア文学の古典にも見つけることができる。たとえば、ミハイル・レールモントフの詩には、谷間で銃弾をうけて死に瀕している男と、晩餐会に出席している女性が、互いに互いを夢みているという内容のものがある。ナボコフはレールモントフの『現代の英雄』を息子と英訳したさい、序文でこの詩の構造を解説し、「三重の夢」と名づけている<sup>17</sup>。荘子の「胡蝶の夢」だけが、ナボコフの靈感の源ではないものの、少なからぬ影響を与えたことはまちがいない。

## 6、蝶と魂

ナボコフがハーンのおつめた蝶の幻想的なエピソードに注目したのは、ハーン自身が蝶にそういったものを見いだそうとしたからだったと言うこともできる。西洋近代文明から見捨てられたように感じていたハーンは、日本の蝶がもつある種の象徴的な意味に惹かれていた。「蝶」のなかで、ハーンは日本の蝶が死者と生者双方の魂を象徴しているとして、「日本の信仰では、蝶は死者と同じように生者の魂である。実際、魂が肉体から脱げでるさいに蝶のかたちをとって報せにくると言うことがよくある」と報告している<sup>18</sup>。魂の不死とアニミズム的な信仰の合体——それは当時の西洋人がまさに東洋に見ようとしたものと合致する。ハーンとときおり手紙を交わしていた詩人W・B・イェイツ——彼自身、東洋に強い関心をもっていた——も、「魂の再生」をハーンが日本で見いだしたとして特筆している<sup>19</sup>。

『怪談』の「蝶」の章の最後にも、ハーンは蝶と再生をめぐる神秘的な挿話を加えている。江戸の郊外に、高浜という老人が住んでいた。老人はおだやかな気性で、周囲の人々はなぜ、老人がこの年まで結婚しなかったのか不思議がっていた。夏、高浜は病に倒れ、義理の妹とその息子が看病のためにやってきた。ある午後、大きな白い蝶が高浜の屋敷に入ってくると、病人の枕もとを飛びまわった。蝶がなかなか老人のそばを離れようとしないので、甥は庭に蝶を追っていった。すると蝶は、ある墓石の前まで甥を導くと、そこでふっと消えてしまった。見覚えのないその墓は、五十年ほど前に齢十八で亡くなった「明子」という女のものがだった。家に戻った甥は、義理の伯父がたった今息をひきとったことを知り、自分の不思議な体験を母に話した。母は驚いて息子に高浜の過去を話して聞かせた。もう五十年も前、若かりし高浜は契りを交わした明子という娘がいた。しかし、明子は病に倒れ、帰らぬ人になった。口には出さなかったが、高浜は死んだ明子に操をたて、その墓所を清めるのを日課にし

た。高浜の義理の妹は、その蝶こそ明子の魂だったに違いないと息子に語った<sup>20</sup>。

死者が生前懇意にしていた生者のもとを訪ねる——ナボコヴィアンは似たようなプロットをもつナボコフの作品が容易に思い浮かべることができるはずだ。杉長の句をノートに書きうつした翌年の一九二四年、ナボコフは「クリスマス」という題の短編を執筆している。これも、蝶と死をめぐる物語だ。クリスマス・イブの日、スレプツォフは故郷へと帰ってきた。夭折した息子を一族の墓所に葬るためだった。深夜、喪失の苦しみに耐えられず、スレプツォフは自殺すら考える。しかし、息子が大事にしていたさなぎから「巨大な Attacus Atlas」が羽化し<sup>21</sup>、その翅をゆっくりと広げるのだった——あたかも、スレプツォフにせめてもの慰みをあたえるかのように。蝶という題材が目を惹きやすいこともあり、この短編は批評の俎上に上りやすいが、論者の多くはこの蝶を息子の魂だと解釈している。この、死者の蝶への転生というプロットは、ハーンの物語にその原型を見いだせる。ちなみに、この Attacus Atlas という蝶のさなぎは、物語の中ではインドに由来することになっているが、沖縄の一部の島に生息するヨナグニサンと同種である。ナボコフは当然このことを知っていたのだろう。

ずっと後年になって、英語作家に生まれ変わった後でさえ、ナボコフは似た構造を作品に用いている。一九六二年に発表された長編『青白い炎』は、ナボコフの代表作と見なされている。この作品の主人公のひとりである詩人シェイドは、語り手キンボートの話によれば、人違いによって暗殺者グラドウスに殺害されてしまう。その「死の一分前」に、一頭の「暗いヴァネッサ蝶」——ヨーロッパアカタテハ——がどこからともなくあらわれて<sup>22</sup>、迫りくる暗殺者グラドウスの手から救いだそうとするかのように、詩人ジョン・シェイドの服にとまる。この小説についてのモノグラフで、ブライアン・ボイドはこの蝶は自殺したシェイドの娘ヘイゼルの生まれ変わりだという仮説を提出しているが<sup>23</sup>、今まで論じてきたような蝶と転生の物語の系譜は、この説を補強するものだ。もちろん、醜い芋虫からさなぎという仮死状態を経て羽化する蝶は、古代ギリシアでも魂や不死と結びつくものとされていた<sup>24</sup>。ラフカディオ・ハーンは、自らのルーツでもある西洋文化のインスピレーションの源に、東洋の伝承を合流させていたのだ。

## 7、ナボコフと日本

いままで見てきたような「ナボコフと日本」、「ナボコフと東洋」といった観点は、ナボコフという作家の理解に、新たな光をあてるものだと言える。帝政ロシアに生まれ、貴族の伝統的な教育を受け、当時であっても保守的な教養をたくわえたこの作家は、ヨーロッパ中心主義者だと見なされてきた。また、ナボコフの学究的な気質は、気軽に流行の東洋趣味にじょうじることを自分にゆるさなかった。かつて、日本の文芸誌『海』が、創刊準備号の特別アンケート企画として、世界中の作家にアンケートを実施したことがあった。「特別企画 日本および日本文学について——海外第一線級作家へのアンケート」と題されたこの企画は「スーパーエディター」安原顕の発案によるもので、封筒にドル紙幣が同封されていたらしく、ル・クレジオ、アラン・シリトー、ジョン・アップダイクなどそうそうたる顔ぶれが回答をよせている。

多くの作家が日本についての知識を総動員して、好意的な回答を寄せているなかで、ナボコフの回答は海の向こうの読者を当惑させるのに十分なものだった。手紙自体がヴェラの代筆で、八つある質問にたいしてほとんど一語ないし一行で回答している。そのうちの「日本と日本人についてどう思われますか？ いままで日本文学をなにか読んだことがありますか？ あるとしたら、なんですか？ そしてそれをどう思われましたか？」<sup>25</sup>という質問に対する、ナボコフの回答は次のようなものだった——「私は日本語を知らないし、翻訳を信用していない」<sup>26</sup>。

こうしたナボコフの翻訳に対する懐疑的な態度は、一九六六年に発表した『エヴゲーニイ・オネーギン』の翻訳と前後して強まったと見ることができる。ナボコフはこの複雑な脚韻形式をもつ古典を、脚韻の再現は不可能として、英語に散文訳したからだ。他方で、ナボコフが亡命生活を送っていた二〇世紀初頭の西欧では、ジャポニズムが流行していたこともたしかだ。たとえば、日本の俳句は二〇世紀初頭の西欧の詩壇では流行の素材だった。エズラ・パウンドがイマジズム運動の綱領的な詩「地下鉄の駅で」（一九一三年）を、荒木田盛武の句「落花枝に帰ると見れば胡蝶かな」にヒントをえて書いたことはよく知られている<sup>27</sup>。先述のイエーツも日本の能に影響をうけた作品を書いている。モダニズム文学の流れで言えば、エリオットの「荒地」が発表されたのは、ナボコフがケンブリッジ大学で学んでいた一九二一年のことだった。

しかし、ナボコフはこうした同時代の英国詩壇に一貫して無関心だった。ナボコフとジャポニズムの接点があるとすれば、亡命先の西欧のモダニストたち経由ではなく、祖国のロシア経由だっただろう。たとえば、少年時代にナボコフの絵の家庭教師をしていた画家のムスチスラフ・ドブジンスキーは、日本から輸入された浮世絵に熱中していた。世紀の変わり目ごろの話である。

ロシアでとりわけジャポニズムの影響を強く受けたのは、ナボコフのひとつ前の世代にあたる、象徴主義の詩人や作家たちだった。コンスタンチン・バリモントは、ロシアの文学者としてはじめて本格的に日本を訪問して歓待され、その文化に感銘を受けた。ヴァレーリー・ブリューソフやアンドレイ・ベールイといった詩人は日本の短歌や俳句の形式を模した作詩を残している。

こうしたジャポニズムの系譜の作家に、直接ナボコフを連ねようとする試みもある。日本研究者ワシーリー・モロジャコフは、スパイだとして粛清された詩人ニコライ・グミリョフに捧げた三行詩「グミリョフを追悼して」“Памяти Гумилева” は、ナボコフなりの「発句」だと指摘している。<sup>28</sup>

正々堂々、明々白々に、きみは死んだ——詩神が教えたとおりに死んだ。

今、天上の静謐に包まれて、きみと、天駆ける

青銅のピョートル、吹き荒れるアフリカの風について語りあっているのは——プーシキンだ。<sup>29</sup>



この詩が書かれたのは一九二三年三月一九日、まさにナボコフがノートにキベリタテハの絵を描いた年だった。

ナボコフがいくら表面的には日本や日本文化に冷淡かつ無関係なように見えても、時代の潮流にさらされていたことはまちがいない。表層的な影響関係だけではなく、ユーリー・レヴィングのように、日本的な感性とナボコフの美意識を対比させ、「問題はむしろ、ナボコフのいくつかの美学的立場と東洋的な世界観が共通していること、思考の方や現実との関係の親近性、真理の探究において抽象的な論理より直感を重視することにある」と指摘する研究者もいる<sup>30</sup>。ナボコフ自身はハーンと異なり、太平洋を渡ることはなかったが、その作品がはっきりとは感知されない方法で日本と結びついていたと仮定することは可能である。自伝『記憶よ、語れ』で、ナボコフは自分が少年のころ捕まえようとしたアゲハチョウが、ベーリング海峡を渡り、西回りでアメリカにたどりついた作家とロッキー山脈で数十年越しに再会する様子を描いている<sup>31</sup>。コスモポリタンの先達であるハーンが極東で見つけた蝶は——南北アメリカを縦断する渡り鳥なるぬ「渡り蝶」であるオオカバマダラのように——ユーラシア大陸を横断し、もうひとりの亡命者によって異郷で捕らえられることになった。あるいは、文学的バタフライエフェクトとでも言うべきかもしれない。日本の蝶のはばたきが、ナボコフの作品世界に小さな<sup>トルネード</sup>竜巻をひきおこしたのだから。

## 8、詩から詩へ

一九七二年、スイスのモントルー・パレスでホテル暮らしをしていたナボコフは、ロシア語詩「どんなにグミリオフの詩を愛したことか」“Как любил я стихи Гумилева!”を書いた。この詩は、ナボコフの作家としての——そしてロシア語詩人としてのキャリアの最晩年に属する作品にあたる。

どんなにグミリオフの詩を愛したことか!

読み返すことはできなくても

その断片の痕跡は

脳に刻まれている——そうたとえば、

「私は夏の<sup>あずまや</sup>四阿で

食べすぎと暑気のせいで死ぬのではなく

天国の蝶を網に入れたまま、

険しい山の頂で死ぬのだ」<sup>32</sup>

詩の後半は詩人ニコライ・グミリオフの詩「私とあなた」（一九一七年）をふまえたものになっている。ナボコフはこの詩を書いたとき、自分が半世紀前に拾いだした俳句と、その形

式を模してグミリョフに捧げた詩のことを思いだしていたことだろう。

一九七五年七月、七六歳のナボコフは、避暑に訪れていたスイス・ダヴォスで蝶の採集中に足を滑らせ、担架で救出される騒ぎになった。骨折こそしなかったものの、この怪我はナボコフの健康を決定的に損ねる一因になってしまったのだが、それでもナボコフは怪我をおして蝶の採集に出かけたという<sup>33</sup>。ハーンの手渡した句は、彼の詩集の警句<sup>エピタフ</sup>だけでなく、墓碑銘<sup>エピタフ</sup>にふさわしいものだったのだ。

注

1. 本稿は Shun'ichiro Akikusa, "Nabokov and Hearn: Where the Transatlantic Imagination Meets the Transpacific Imagination," in Brian Boyd and Marijeta Bozovic eds., *Nabokov Upside Down* (Evanston: North Western University Press), forthcoming 2017として出版予定の論文を、著者自身が翻訳したものである。ただし、画像など、元の論文をすべて掲載したものではないことをお断りしておく。

本稿を掲載するにあたって、バーグ・コレクションにおさめられた資料の閲覧を許可してくれたナボコフ・エステート、および本発表を二〇一二年一月にニュージーランドのオークランド大学でおこなわれた国際ナボコフ学会で発表したさい、コメントをいただいた中田晶子先生、この日本語版のもとになった英語版作成の過程で、コメントと原稿の修正に力をかしてくれたブライアン・ボイド先生と畏友デイヴィッド・ボイドに感謝します。

2. New York Public Library Berg collection. Stikhi 1923. Holograph notebook, described as Album 8, January 10 to October 17, 1923. なお、このページは、一九九九年にニューヨーク公共図書館でおこなわれた「ガラスの下のナボコフ——生誕百週年記念展覧会」で展示された。この蝶のイラストを含む、この展覧会の展示の一部は、現在でも公共図書館のウェブサイトで見ることができる。Nabokov under Glass [http://web-static.nypl.org/exhibitions/nabokov/37.htm] (2016年1月27日閲覧) New York Public Library Berg collection. Stikhi 1923. Holograph notebook, described as Album 8, January 10 to October 17, 1923.

3. Horst Tappe, *Vladimir Nabokov* (Basel: C. Merian, 2001).

4. Andrew Field, *VN: The Life and Art of Vladimir Nabokov* (London: Macdonald, Queen Anne Press, 1987), p. 38.

5. 一九六二年のインタビューより。Vladimir Nabokov, *Strong Opinions* (New York: Vintage International, 1990), p.10.

6. Vladimir Nabokov, *Speak Memory: An Autobiography Revisited* (New York: Vintage International, 1989), p. 26.

7. Lafcadio Hearn, *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things* (New York: Cosimo, 2004), p. 193. この英訳は原詩の意味からすこしずれている。おそらくハーンは句にある「いつまでも」"itsumademo"を「いつでも」ととりちがえたのだろう。齢四十にして来日したハーンが、日本語の読み書きがあまりできなかったのは有名である。

8. Lafcadio Hearn, *Kottō and Kwaidan (The Writings of Lafcadio Hearn: In Sixteen Volumes; v. 11)*, (Cambridge: Riverside Press, 1923).

9. 長澤純夫「編訳者あとがき」小泉八雲（長澤純夫編訳）『蝶の幻想』築地書館、1988年、270頁。

10. ラフカディオ・ハーン（仙北谷晃一訳）『蝶の幻想』西脇順三郎、森亮監修（平川祐弘、仙北谷晃一、池田美紀子、河島弘美、牧野陽子訳）『ラフカディオ・ハーン著作集 第一巻 アメリカ雑録』恒文社、188頁。Lafcadio Hearn, *Miscellanies* v. 1, Albert Mordell, ed. (London: William Heinemann Ltd. 1924), p. 193.

11. Brian Boyd, *Vladimir Nabokov: The Russian Years* (Princeton: Princeton University Press, 1990), p. 218.

12. Vladimir Nabokov "Painted Wood," *Karussel* (Berlin: Karussel, 1923), p. 9.

13. 生物学者の荒木崇によれば、ナボコフは日本の蝶に専門的な関心を持ち続けていたという。荒木崇「ナボコフと鱗翅学」（京都大学、日本ナボコフ協会秋の研究会、2011年9月19日）

14. Hearn, *Kwaidan*, p. 182.

15. Vladimir Nabokov, *Nabokov's Butterflies: Unpublished and Uncollected Writings*, eds. Brian Boyd and Robert Michael Pyle (London: Allen Lane, The Penguin Press, 2000), p. 472.

16. Brian Boyd, "Annotations to Ada," *The Nabokovian*, vol. 65, 2010, p. 65.

17. Mikhail Lermontov, *A Hero of Our Time*, trans. Vladimir Nabokov in collaboration with Dmitri Nabokov (New York: Everyman's Library, 1992), p.1.
18. Hearn, *Kwaidan*, pp. 184-185.
19. 「古き国家はみな魂の再生を信じていた。それは、ラフカディオ・ハーンが日本で見いだしたように、経験的にたしかなものとしていた」。William Butler Yeats, *Explorations* (London: Macmillan, 1962), p. 396.
20. ハーンは似たようなプロットの「ハエの話」を、『怪談』とおなじ五巻の『ラフカディオ・ハーン著作集』におさめられた、『骨董』で使った。ここでは死んだ女中がハエに転生して、主人に預けた金で自分の菩提を弔うように頼んでいる。
21. ロシア語短編「クリスマス」「Рождество」(一九二五年)は、一九七六年に英語に作者と息子ドミトリー・ナボコフの手によって翻訳された。ただし、この蝶の種名 *Attacus Atlas* は英語版にしか見いだすことができない。Vladimir Nabokov, *The Stories of Vladimir Nabokov* (New York: Vintage International, 2002), p. 136.
22. Vladimir Nabokov, *Pale Fire* (New York: Vintage International, 1989), p. 290.
23. Brian Boyd, *Nabokov's Pale Fire: The Magic of Artistic Discovery* (Princeton: Princeton University Press, 2001).
24. ナボコフが愛用していた辞書であるウェブスター第二版によれば、ギリシア語の蝶 *Psyche* は「美しい乙女、魂を擬人化したもの、通例蝶の翅をつけた姿であらわされ、不死性の象徴である」としている。ボイドは、*Psyche* が、ナボコフが論文を寄稿していた昆虫学の学術雑誌のタイトルであることを指摘している。ナボコフ作品における蝶のシンボルのテーマについては『ナボコフの蝶』の「まえがき」参照。Brian Boyd, "Nabokov, Literature, Lepidoptera," in Vladimir Nabokov, *Nabokov's Butterflies: Unpublished and Uncollected Writings* (Boston: Beacon Press), 2000. p. 20.
25. "How Writers Abroad Look at Japan and Japanese Literature," 『海』 創刊準備号、1969年、1頁。
26. 同書、10頁。
27. パウンドはこの句を自ら英訳しているが、どこでパウンドがこの俳句を知ったかについてはカール・フローレンツのドイツ語訳から、アーサー・ロイドが英語に重訳したものをパウンドが読んだという説が有力だが、ハーンの「蝶」でこの句が紹介されていることから、それをパウンドが読んだのではないかと主張する研究者もいる。そうだとすれば、パウンドとナボコフという対象的な翻訳観を持つ詩人／作家が、同じハーンの「蝶」からインスピレーションを受けていたことになる。Ezra Pound, *Gaudier-Brzeska* (London: John Lane, 1916), p. 102.
28. ワシーリー・モロジャコフ (村野克明訳) 『ジャポニズムのロシア：知られざる日露文化関係史』藤原書店、2011年、101頁。
29. *Набоков В.В. Собрание сочинений русского периода в 5 томах. Том 1. СПб., 1999. С. 605.*
30. ユーリー・レヴィング (諫早勇一訳) 「ウラジーミル・ナボコフの日本」『K R U G』2巻2号、2002年、7頁。
31. Vladimir Nabokov, *Speak, Memory: An Autobiography Revisited* (New York: Putnam, 1967), p. 120.
32. *Набоков В.В. Стихи. Энн Арбор, 1979. С. 297.*
33. Brian Boyd, *Vladimir Nabokov: The American Years* (Princeton: Princeton University Press, 1991), p. 652.

# Nabokov and Hearn: Where the Transatlantic Imagination Meets the Transpacific Imagination

AKIKUSA Shun'ichiro

---

In his prolific youth Nabokov collected his poems, after completing them, in a series of holographic notebooks now preserved in the New York Public Library. In one such notebook he drew an elaborate title page featuring a butterfly spread as if in a collection. Beneath this he quoted an obscure Japanese poem, and identified it in parentheses as “Japanese hokku.” The short poem reads:

Chō wo oï  
Kokoro-mochitashi  
Itsumademo!

The three lines form a flawless haiku, which have been translated into English as: “I would like to have the youthful mind to chase butterflies forever!” The poem seems a perfect motto for Nabokov, the eternal butterfly hunter. Yet Nabokov’s reference is puzzling, since—although he was versed in three languages—he never learned Japanese. Where did Nabokov come across this tristich?

We discover the missing piece of the puzzle in yet another cosmopolitan—Patrick Lafcadio Hearn (1850-1904). Hearn’s most famous work—*Kwaidan* (1904)—is largely understood as a collection of haunting, supernatural Japanese tales. However, the same volume also features “Insect-studies,” of which Hearn was quite fond. In the section entitled “Butterflies,” Hearn introduces a number of Japanese legends and poems related to the butterfly. The section includes English translations as well as transliterations. In “Butterflies” we find the very haiku (originally penned by Sancho, a minor poet who lived in the Edo period) that Nabokov cited in his notebook. In 1923, Houghton Mifflin republished Hearn’s *Kwaidan* under the title *The Writings of Lafcadio Hearn*. Nabokov most certainly read the large paper edition and proceeded to use the impressive Japanese poem as an epigraph in his notebook.

The influence of Hearn’s “Butterflies” can also be seen in Nabokov’s other works, such as “Christmas” and *Ada*. In my study, I will discuss the hitherto unexamined relationship of the two

extraterritorial writers. I hope to demonstrate that this small poem was not merely an epigraph to Nabokov's notebook, but his whole life.